

日本オーストリア交流140周年の公式行事に参加して

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)

日本は二、三の国を除いてヨーロッパの国々と交流を始めて、今年

は一四〇周年にあたる。日本オーストリア交流一四〇周年



公式行事としてウィーンで四回目となる展覧会を五月にした。

府中市と友好関係にあるヘルナリスの市民大学で開催され、五月五日のオープニングにはたくさんの方がきてくださり、区長、前区長からもご挨拶をいただいた。また、二日間、型絵染版画のワークショップもした。

こちらでも多数の参加者があり、展覧会も大変好評で、日本文化への高い関心を寄せてくれた。

展覧会直前に突然わいた新型インフルエンザ、レベル5に引き上げられ、ウィーンへくる知人の二人は旅行をキャンセルした。オーストリアではテレビの放映もなく、予防には手洗いをしなさいというくらいで、マスクをかけている人もいなく、話題にも上らない。全ての行事は滞りなく行われていた。日本とは大きな違いがある。

私は九月に再びウィーンへ、ハイドンを育んだ街アイゼンシュタットで展覧会がある。また、九月には型絵染版画で作った二〇一〇年用ドイツ語版のカレンダーも出版される。

夏の一夜



永岡 慶之助

(作家)

どのような話題からの流れだったかは、記憶が定かではない。してみると、私もかなり酔っていたようだが、Y氏がコップを片手に陶醉した面持で、ポツリと、「K先生から、私はフランス語を学んだのです。」と言い、いかにも若き日を懐かしむ風であった。初めて知るY氏の経歴の片鱗であり、私は心の中に「成程」と頷くものがあったものだ。

ちなみに、Y氏はG銀行の頭取から相談役に退いて以来、地元の若き経営者達の育成に当っておられ、すでに三年ほど私塾的な集会を持たれているとの事であった。そうしたY氏の集会に、夏の一日、招かれて「歴史こぼれ話」といったお喋りをした後の酒席で、図らずと前記のような述懐を聴いたのである。

Y氏の温厚で、少しも偉ぶることな

い人柄と、図らずも耳にしたフランス文学者の名から、ふと私が思い出し、懐かしんだのは小牧近江先生の面影であった。

仏学者小牧氏は、少年の日、国際会議に出席する父君に伴われてフランスに渡航し、パリのアンリ四世小学校に入学した。この小学校は、『肉体の悪魔』や『ドルジェル伯の舞踏』を書き、わずか二十歳で夭逝した早熟のラディゲも学んだという名門校である。

父君は会議が終わるや、さつさと日本へ帰ったから、小牧少年は寄宿舎暮らしを続け、やがてパリ大学法学部に進学したところで、思いがけなく第一次世界大戦が勃発、故国日本からの送金が途絶えた。やむなく日本大使館の皿洗いをしながら、勉学をつづけた。

「一応、食うには困らなかつたものの、あのキリンの脚のように細く長い極薄のコップは、ちよつと力を入れると折れちゃうので、あれには神経が疲れて苦勞したね。」

これは鎌倉稲村ヶ崎、七里ヶ浜近い

お宅で同氏から伺った、パリ留学時代の思い出である。当時の私は、雑誌の編集者として小牧氏に接したのだが、機智とユーモアにとんだ会話、少しも偉ぶることなく、決して温容を崩さなかった同氏には、大いに学ぶところがあつた。

この点は、やはり稲村ヶ崎近い伊集院邸の離れ屋に、当時借家住いをしていた英文学者吉田健一氏も同じである。

同氏は宰相吉田茂の御曹子にかかわらず、カーキ色の軍帽に兵隊服に底のへしゃげた靴を履き、しかし少しも臆することなく、江ノ電の車内で出会つたりすると、若輩の私に、「今お帰りでですか」などと優しく言葉をかけるのであつた。ケンブリッジ大出身の同氏は、原書を小脇に抱え、車内でも独り毅然としてゐるのである。

さて、仏文学者小牧近江氏だが、今だに忘れ難いことがあつて、思い出しては独りわらいをするのであつた。ある春の日曜日の朝、当時、極楽寺月影谷の奥に住んでいた拙宅に、飄然と訪

ねて来られた小牧氏が開口一番、「そろそろ頃合いかと思ひましてネ」と仰つたのには理由がある。

今では信じ難いことだが、そのころ創刊された新聞「新夕刊」紙上に、「ドブロクの作り方」が掲載された。それを参考に私の家内が、登山用のコツヘルにタネを仕込み、毛布を巻いて熟成させた。この話を何かのついでに漏らしたのだが、こよなく酒を愛す小牧氏が、待ちかねて来られたのだ。

小牧氏と私は、コツヘルを手を下げ、いそいそと稲村ヶ崎の見晴しのよい、桜の下に腰を据えると、おもむろに貴重なドブロクをコップに注いだ。所は春の海を眼下にした稲村ヶ崎、白砂つづく七里ヶ浜とロケーションに申し分はない。が、一くち口に含んだ瞬間、二人は異口同音に「あつ」と叫んだ。なんとよく醸されて甘美な筈のドブロクが半ば酔と化していたのだ。すなわち、新聞のレシビ通りに造つた筈なのだ、が、まんまと失敗したのだ。しかし、

先生は少しも慌てず、「ナニ、飲めばそのうち酔えるでしょう」と言い、それから二人は、一くち口に含んでブルツ、ブルツと身をふるわせながら、咲き誇る桜の樹の下で、江の島を眺望したのである。

私が鎌倉を去つて数年後、「ある民族主義者の死、南ベトナムの安定を願つて」と題するエッセイが、A新聞紙上に載つたが、そこには鎌倉長谷の大仏を前に、ゴ・ジンジエム大統領と並んだ小牧氏の姿があつた。大統領がアメリカへ亡命の途次、旧知の小牧氏をわざわざ訪問したのである。

私は、Y氏がふと口にした、仏文学者の名から、図らずも今は故人となられた小牧近江の面影を想起し、胸が熱くなるほど懐かしんだ。過ぎ去りし日々が、まるで昨日の事のように蘇つたのには驚いた。この夜のお膳立てをしてくれた営業部長のT氏も、若き経営者たちと歓談しており、心地よく夜は更けていった。

亀の恩返し



山本千明

(ECC英会話講師)

十一年目にして初の冬眠を経験した我が家のペット、ミドリガメのピケちゃん。今年四月に無事眠りから覚め活動を開始した。ところが彼女の冬眠の直前に実は予想外の環境の変化が起こっていた。昨年夏に初めての産卵をしたがシングルマザー故、孵化することもなく卵はそのまま地中の肥やしとなつてしまった。やはり一生独身では可哀想かな。せめて話相手でも居た方がいいかな？そんな考えがふと頭を過つた数日後の出来事である。その「世にも不思議な物語」の幕は突然に上げられた。午前の仕事を終えた帰り道。ほつとした気持ちで車の外に流れる景色を楽しんでいた。土手沿いに群生する赤い曼珠沙華。秋風に遥れる清楚な佇ましい白い萩の花々。澄んだ青い空にさ

らりと浮かぶうろこ雲。思わず陽水の「少年時代」など口ずさみながらふと何かに誘われるようにいつもと違う道を走ってみたくなった。自他共に認める方向オンチの私である。慣れない道をプチドライブするうちにいとも簡単に迷ってしまった。道はどんどん狭く怪しくなっていく。民家も疎なヤブの道に突入。我に返つて元来た道に帰るべくスピードを弛めハンドルを切ろうとしたその瞬間、10メートル程先を何かがのっそり横切つた。反射的にブレーキを踏み目で追うと間違ひなく野良亀である。どこから出て来てどこへ行くのか？周囲に池や川は見当たらない。気になって見ていると細い道の反対側にある小さな用水路の前で停止した。そして5秒後、「ゴトンッ」という

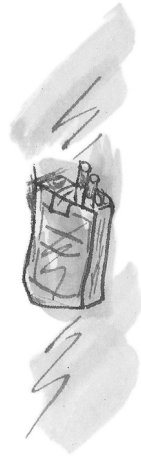
音と共に亀は消えた。慌てて車を降りて覗きこむと——いた。平面のお腹をこちらに見せて足をバタつかせている。完全に「そここの人。早く助けて下さい」状態だ。よいしょと持ち上げてよく見れば、うちのピケちゃんとはほぼ同じ「洗面器にスッポリ」サイズ。甲羅には乾いた土がこびりつき柄は不明だが、ぬうーと伸ばした顔の側面には鮮やかなオレンジ色のラインがある。ピケちゃんと同種のみドリガメさんだ。もう一度辺りの様子を確認。やはりヤブばかりでこの子を帰してやれそうな水辺はどこにもない。しかも先程落っこした幅も深さも30センチほどの乾いた用水路が続く危険地帯である。自らダイブしてそのまま起き上がることもできないお間抜けな所業を見れば保護に値すると判断してうやうやしく棒げ持つと車の後部座席の下にお乗せした。再びいつもの道に戻って帰りながら狐にまつまされた気分だった。ピケちゃんに「相棒」が居た方がいいかなと考え始めて10日も経っていない。私には「願え

ば叶う」特殊能力があるのか？いやいや、今でも「一億円あったらいいな」とか「主人が痩せてくれたらいいな」とか何度も考えた。しかしお金の束が降って来たこともなければ主人の体重も増加の一途を辿るばかり。何故、亀だけが絶妙なタイミングで「はいどうぞ」とばかりに差し出されたのだろうか？謎と亀を抱えたまま家に到着。早速フェンスで囲った庭に放すとザザッと走り出して草の中に身を隠した。流石、野生育ち。かなりな駿足である。オスカメスカ不明のままだが、とりあえずピケちゃんの水槽に入れてみた。水の中で乗ったり乗られたりパニック状態になった。お互いを意識する以前にうまく身動きがとれない様子だ。大きな亀二匹に衣装ケースの「池」はやはり狭すぎる。考えた挙句衣装ケースの横にブロックを積み、ベニア板でスロープを作って出入り自由なバリアフリーハウスにしてみた。すると昼間は気が向いた時に庭で散歩して夜は二匹ともお家に帰って仲良く水中で眠るようにな

った。カメフードを水面にパラパラ撒くと顔を並べてぶかあと浮かび交互にあもつあもつとよく食べる。そして数週間後二匹共に冬眠となったのである。凍り付く冬が過ぎ日差しが柔らかくなってきた。一匹揃って初めての春。相性は良かったものの今だ「女友達」なのか「彼氏」なのかは分からない。やがてピケちゃんが去年と同じ動きをし始めた。庭でせつせと穴を掘り狙い定めたようにコロリコロリと卵を産み落とす。まっ白で艶やかな卵は一つ一つが神々しい。ザツザツと慣れた足つきで丁寧な土を掛けると何事も無かったように日常生活に戻っていった。食欲旺盛でカメフードの他にエビやニボシも吸い込むようによく食べる。さて今回の卵の運命は？もし保護した亀がオスだったら…。そうであってほしいという気持ちとそれは話が出来すぎでありえないと思う気持ちで複雑な心境のまま時が過ぎていった。蟬時雨が追力を増してくる頃、わんこ達に冷たい水を差し入れしようと庭に出た時、い

つもなら寄って来る筈の彼らが今日は庭の隅に固まってぶんぶん尻尾を振りながらクンクン匂いを嗅いでいる。「何を見つけたの？」と彼らの鼻先にある物を見て目が丸くなった。小石！？ではない。50円玉くらいの小さな亀が甲羅だけの状態でわんこ達に包囲されている！恐る恐る指先でつまみ上げると乾いた状態で生きている気配がない。「もっと早く気がついてやれば…」と無念の思いでそのまま水を張った小さな容器に静かに入れてみた。すると数秒後、小さな小さな足が出て来た。続いてぴよこりと顔も出た。そこにはくつきりとオレンジのラインが走っている。正真正銘ミドリガメだ！しかも生きていた！それから二ヶ月が過ぎた。リビングの水槽の中でその子は元気に泳ぎ回っている。その可愛らしい姿に、見る人は皆必ず笑顔になる。竜宮城への招待状は届かなかったが、多少煙に巻かれたもののお婆さんになることもなく小さな贈り物をいただいた。

健康に悪いといわれても、 やめたくないこと



上杉正幸

(香川大学教育学部 教授)

わが国が高度経済成長を成し遂げた頃の一九八〇年に、NHKが人々に生

活の中で大切なことをたずねた結果、健康が61%でトップになった。二〇〇八年にたばこ総合研究センターが行った調査でも、健康が同じく61%でトップであった。また一九八一年に、内閣府が人々に生活の不安をたずねた結果、自分の健康への不安が37%でトップになった。二〇〇八年の調査ではその不安が49%で、老後の生活不安に続いて二位であった。しかし、老後の生活不安には健康不安が含まれているのであ

り、依然として人々の健康不安は強いといえる。

この二つの調査から、日本人は最も大切な健康が最も不安な生活を三十年近く続けてきたといえる。最も大切なことが最も不安という生活は、ひとつの不幸であり、その不幸を背負いながら過ごしてきたことになる。

この間、人々はこの不幸に気づかず、もっと健康になりたいという欲求を肥大化させてきた。それを誘導しているのが、健康のためには異常を排除しなければならぬという考え方である。

それに沿って医学は次々と異常を見つけ出し、その排除を人々に呼びかけてきた。そして異常を見つけ出そうとする医学の目は、人々の生活習慣にまで向けられるようになり、一九九六年には成人病という名称が生活習慣病に変更された。それによって、有害物質や放射線、紫外線、排気ガスなどの外部要因のみならず、不規則な食事や睡眠、運動不足、肥満、痩せ、ストレス、飲酒、喫煙、間食、食べ過ぎなどの生活習慣要因が危険因子（異常）とみなされ、人々もそれらを避けた生活をしようという意識が高まってきた。

生活習慣病の設定は、あれダメ、これダメという風潮を強めることになったが、すべての異常を排除しようとする、人は生きる意味を見失うことになる。そのことを端的に示しているのが、「不眠不休で」「寝食を忘れて」「髪を振り乱して」「汗水を流して」「汗と埃にまみれて」などの表現がある。これらはいずれも、人が何かに熱中し、夢中でとりくむさまを表現しているが、

一方そこには危険因子が含まれている。もしそのとき、「食事と睡眠を規則正しくしよう」「汗や埃にまみれるのは不潔だからやめよう」と考えると、人はそれに熱中できなくなる。意味を求める人間にとつて、それは本末転倒である。

すべてに健康が優先する生活が求められようとしている現在、生きる意味との関わりにおいて、健康とは何かを考え直してみる必要がある。そのことを考えるために、私は大学の授業や講演で、「健康に悪いといわれてもこれだけはやめたくないことがありますか」とたずねてきた。その結果をみると、男性では酒がトップ（44%）となっており、「毎日の晩酌」などの回答とともに、「糖尿病だが一合の酒がやめられない」という回答もあった。

次がたばこ（42%）で、「たばこは精神安定の必須条件」などの回答があった。不規則な睡眠（9%）に関しては、「自分の時間を持つため夜更かしをする」などの回答があった。味の濃い食事・脂っこい食事（6%）に関しては、「ラー

メンの食べ歩き」「味の濃いみそ汁」などの回答がみられた。さらに趣味・スポーツ（6%）に関して、「夜つり」「紫外線を気にするとゴルフができない」などの回答がみられた。以下、間食（4%）、コーヒー（3%）、電磁波（2%）と続き、勉強・仕事（1%）に関しても、「徹夜でする医学の勉強」「農作業のやりすぎ」という回答もみられた。

女性では間食がトップ（37%）で、「おやつを食べられないことがストレスになる」「間食は仕事をする自分へのご褒美」などの回答がみられた。次が酒（20%）で、「毎日だんなどちびちび飲む酒」「ビールを飲むと次の日も働ける」などの回答があった。不規則な睡眠（14%）に関しては、「肌が悪いがよくなる」と元氣「先が短いと時間が惜しい」という回答がみられた。たばこ（12%）に関しては、「たばこだけはやめられない」などの回答があった。味の濃い食事・脂っこい食事（11%）に関して、「カロリーの多い食事」などの回答があった。趣味・スポーツ（4%）

に関しては、「夕食抜きで習い事」「夜の刺繍」などの回答がみられた。以下、コーヒー（4%）、電磁波（4%）、食べ過ぎ（3%）、エアコン（3%）と続き、化粧（2%）に関しても、「日焼け止めを塗る」「美白」などの回答がみられた。

このように人々の生活をながめると、誰しも何がしかの異常を受け入れながら生活をしている姿が浮かび上がってくる。それは人間の弱さではなく、医学が指摘するすべての異常を排除しようとする、何かに打ち込んだり、何かを楽しむことができなくなるからである。

日本人が健康、健康と叫んで三十年近く過ぎたが、健康よりも大事なものがあることを考える時期に来ているのではないだろうか。その手掛かりとして、一人ひとりが「健康に悪いといわれても、これだけはやめたくないこと」があるかどうかを探してみる必要がある。それによって、一人ひとりの生きの意味がみえてくる。

小説・江戸神仏歳時記 (19)

新宿大久保・稲荷鬼王神社



郡 順 史

稲荷鬼王神社は、新宿歌舞伎町の旧コマ劇場の裏手を職安通りへ出る少し手前の右手角にある。実は筆者は、小学二年から中学二年生頃まで、この神社の少し新宿寄りに住んでおり、祭りだなんだとよくアソビに行つたものだった。その時分はたしか稲荷の冠はついて無く、ただ鬼王神社と呼んただけと記憶しているが、やはり間違いで、大久保宮司さんの話によると、正式にはその昔から稲荷はついていたそうである。

とにかく子供心にも「鬼王」とは奇妙な恐ろしいな名前の神社だと思つていた。第一に節分に豆をまく時、「鬼は内、福は内」と、鬼まで内に招く掛声をかけるのだ。それであるとき母親に理由をたずねた。すると母親に、「鬼の王様を祀つてあるからよ。だからあの神社さんの境内で、たとへ友達にでも嘘をつくとき舌を抜かれますよ」と教訓をまじえて教えられたものだった。現在になって由緒記を拝読すると、母親は適当に言つていたのでわかる。しかしもしかすると氏子の多くは、そう思い、そう信じていたのかもしれない。

それはともあれ、子供たちから祭りの日は楽しく、ランドセルを放り投げて駆けつけたものだった。そう広くない境内の隅にそう高くない富士山があつて、誰が早く登れるか競争したり、神社の周囲を駆け廻つたりしたものだ。が、何よりも楽し

かったのは、掌の中に汗が出るほど握りしめた十錢玉で、並んだ店売りから食べ物を買って、誰に遠慮もなく食べながら歩きまわったことだ。当時は買いい食い、殊に食べながら歩くのを「乞食ではあるまいし」とひどく叱られたものだった。それがおおびらに出来たのだから、それだけでも開放感一杯で嬉しかったのであろう。

店売りの食べ物はおおむね一錢か二錢。どれもがおいしかったが、中でも肉のフライというのが特においしかった。肉といっても、串の元にちよこつと付いているだけで、あとはそれを何かで大きくくるんで、油であげ、あげたてをソースのどんぶりに浸けてムシヤムシヤ食べるのである。これがおいしかった。これが食べたくてランドセルを投げて、と言っても過言ではないと思う。値は忘れたが、たしか一錢か二錢だろう。五錢もしたかな。戦後ふと思いついて出して食べたくなり、家内に頼んで作って貰ったが、肉が多かったゆえかさっぱりおいしくなかった。あれはやはり、祭りの賑わいの中で買いい食いしなが歩いて食べるからおいしかったのかしら。

それと思いつく一つ。この鬼王神社はこの大久保一帯の鎮守さまだから、今から考えれば当然なのだが、出征、入営する兵隊さんを日の丸の小旗を握りしめて、お見送りに来たものだった。その時の兵隊さんの誓いの言葉は記憶していないが、自分の経験から（昭和十八年の学徒出陣で）

きつと悲壮な氣持であつたらうと。そして何人の人が武運めでたく復員して来たのであろうかと。

ともあれ、子供の時分の思い出話はこれくらいにして、神社の御神体やご利益などに触れて行く。

この神社の神域には、もともとお稲荷さんが祀られていたようである。いつから祀られていたか余りに古ゆえ不明だそうだが（二説に承応二年（一六五三・四代家綱將軍）、天保の初年の頃（一八三〇）・徳川第十一代家斉將軍）、この神社に修験者の如き人がおとずれて来て、稲荷堂の前で何やら稱えて祈願していたが、俄に天空をつかむようにして身もだえし、「この所は武蔵國の聖地なり。聖地熊野より鬼王權現様を勧請申上げ、永久に祭祀尊崇仕まつれ。さすればこの地域ならびに住居する人々一同欣幸の日々をおくり安心幸福になること確實なり。天仰鬼王權現、天仰鬼王權現！」と両掌をもみ、大声で叫び、そのままあなたかも踊るが如く五体を躍動させて境内を出、村道を走り去って行った。

これを偶然社務所の中で眼にし、耳にしたのが当社の社家宮司の大久保氏と神社信徒徒代の村松氏であった。（これを神縁か）

（因に「社家」とは、その神社において代々神官宮司を継ぎ勤める家柄のこと。従って今日の稲荷鬼王神社の宮司も大久保姓で、地名をも継承し

ているのだ)

二人は、風除け障子のあいだから覗き見ていたが、修験者が馳け去って行くと、お互に「鬼王権現」と眩き顔を見合せた。そして村松氏が先に口を開いた。

「鬼王権限とは、どんな神さまなのでしょうか」

「今の人が仰有った通り、名は恐しげですが、一名春の神とも稱され、人々、殊に地域に住む人々に幸福をもたらす神とも言われています。言えは善神でございます」

「ならばいまのお人、様子から嘘を吐いているとは思えません。さっそく総代会を開いて、皆さんと、熊野からその神さまを勧請申し上げるよう相談いたしましょう」

「しかしここにはすでに稲荷大明神さまがいらつしやいますから」

「ですから合祀させて戴けばよろしいのです。そうだ、神社名を、稲荷鬼王神社としたりいかがでございますしょう」

村松氏はすっかり夢中であつた。

「稲荷鬼王神社、よい名でございますな。どうぞ総代会の皆さまとおはからい下さい。なお出来れば氏子の皆さま方々のご意見をもうかがつてみて下さい」

二

かくて総代会の相談の結果、「稲荷鬼王神社」に

しようと決定し、宮司と村松氏ほか三名の者が紀州熊野へ鬼王様を迎えに出発した。

もつともその前に、幕府の神社奉行所を通じて合祀の許可を願ひ出ている。再建、新規祭祀、合祀、境内建築物改造拡張など、要するにあつたに何かをする時は、すべて寺社奉行所に届け出、許可をもらわなければならない制度になっているのだ。

かくて「稲荷鬼王神社」が誕生した。

時に天保二年（一八三一）春三月、明治維新（明治元年）の三十七年前であつた。世は正に勤王だ佐幕だと、騒然として落ちつかないままだつた。

が、稲荷鬼王神社は合祀再建と同時に、附近一帯の評判をよび、日々に参拝客がふえ続け、祭日などは狭い境内参道、人があふれるほどになつた。

これにはそれなりの理由があつた。まずは武蔵野の一角の大久保村の周辺をのぞいてみよう。

むろん江戸内ではない。行政管轄は徳川領である関係から、幕府と伊豆韮山の江川代官所の二つにあつた。幕府の手が入つたのは、この周辺一帯に組屋敷、たとえば御先手組の組屋敷、百人組屋敷、それと小役人の長屋住宅などが多くあつたからである。（新大久保に皆中稲荷という神社があるが、あの辺一帯に鉄砲組組屋敷があり、百発百中皆当るようにと祈願した名残りと言われている）

だが、鬼王神社のある大久保村は、環境にめぐまれていたと言ふべきであらう。

すぐ眼と鼻の先には甲州街道、青梅街道、そして四谷大木戸を通って麴町、赤坂といった江戸城近辺に出られる、交通の便良さ。それと繁昌の地新宿、淀橋、角筈、四谷大木戸といった地が隣接していた。ゆえに、大久保に鬼王神社が出来る、すぐ人々の口の端に、「大久保に鬼王神社といった変った名の神社が出来たとよ」

「鬼王？太宗寺にや閻魔大王様がまつられているけど、その真似か？」

「違う違う。なんでも紀州の産で、人を幸福にする優しい鬼神さまだそうで、お詣りすると貧乏からぬけ出せるという話だ」

「本当か！！じゃあご利益もたんとあるんだな」

「さあ、そこまでは出来たてだから聞いちやいねえが、人を幸福にするつて言うんだから、ご利益もたんとあるんじやねえか」

人の噂というものは兎角自分流の作り話が多く、従って無責任だ。しかし一辺の眞実をふくんでいるのも経験で知っている人々は、近所の者はむろん、噂を聞いて新宿四谷、中野村や杉並の方からもやつて来る。それで参拝者が急増したのだ。

だが毎度述べる如く、どんなに初期にご利益があるうとも、また評判が高かろうと、民衆というものはご利益を頂戴出来なくなると、ぴたりと足を止める。信心とはそんな薄っぺらなものではない、と怒つたとて仕方がない。民衆とはもともとそうした現世利益を求めるものなのだ。そのため

に遠きを遠きとしてお詣りするのである。

その一方で、神社側も氏子総代会の役職たちをふくめて、「ご利益をどうしよう」と考える。神社とて繁昌したほうが繁昌しないよりはよいのだから、いつまでも「家内安全、無病息災、招福歓喜、（それと近頃は交通安全、学業成就も加わる）」と、ほかの神社仏寺と同じではお詣りするほうもあきてしまう。他と違う特殊なものでしかも確実にご利益をいただけるものを案出し、神さまにお願いしなければいけない。

鬼王神社も宮司をはじめ総代会一同よりひたひたを集めて智恵をしぼった。その結果考え出されたのが、「鬼王」という名は、一説に平将門の幼名だという説がございます。ゆえにそれにちなんで、武運の神、つまり盗賊の難よけ、しいては火災防止の守り神、としたらいかでございましょう」

「いや、それは聖地大久保にふさわしくない。それよりやはり周辺は町中、特にお詣りする人は商売人が多いのですから、ごく普通に商売繁昌として、私銭を作つて神袋に入れ、お守り札としてお授けしたらどうです」

「それは余りに露骨すぎる。それこそ鬼王権現の御名にふさわしくない」

「私は、ごく平凡ですが、庶民が苦しみ悩むのは病氣が一番なのですから、当病快癒がおんびんで第一等のご利益にふさわしいと思えますが……」

大久保宮司の意見である。

このほかに甲論乙駁いろいろの意見が出たが、最後には、「ちよつと平平凡凡すぎるが、皆であらためて考えなおそう」という事になって、その日の議論は終わった。しかしその後二度ほど会議が開かれたが、結局は宮司の意見できまり、当病をもう少しせめて内臓の病氣、と決定した。

その方法として「豆腐断ち」が考えられた。つまりこの辺は名のきこえた豆腐の産地で、遠くから買ってくるほど味がよくコクがあるが、その豆腐を一定期間食断ちして(つまり食はず)その中に神札を入れて清め、それを病氣の根元個所に当て、しかして当病を治す、というのである。

民衆参詣者は、そんなので簡単に永年苦しんだ胃腸の病いが治るのか、とはじめは半信半疑であったが――。

三

昔から民間には、塩断ちとか茶断ちとかをして、自分の願望をとげようとする風習があった。この豆腐だちも一見その類のようであるが、この辺一带は豆腐が名物名産であるから、はじめは豆腐屋は、「俺たち豆腐屋を日干しにする氣か!!」と怒ったり、無類の豆腐好きは、「豆腐をこの世から無くすつもりか。毎朝豆腐を食わねえと死んじやう俺たちを本氣になって殺す氣か!!」と怒り、神社へ怒鳴り込んで来る者もいた。

しかしその悲鳴も怒号もほどなく消えた。豆腐断ちの効果が信じられるようになって来て、豆腐作りも他の品種を考え売り出したからである。

そのきっかけを作ったのは西大久保村に住む甚助という三十二歳の大工であった。

彼は幼い頃から腸が弱いのか、便通に困っていた。出ないのではなく、出すぎるのだ。たとえば朝、家を出る時、ちやんと出してきても、仕事の最中に突如もおおして来る。一度もよおすと我慢が出来ない。我慢すると出てしまう。出すわけにもゆかないから、あらかじめ調べておいた便所へすつとんで行く。すると仕事の手間が欠けるし、仲間にも迷惑をかける。ほとほと困っていると、鬼王神社の豆腐断ちの噂を耳にした。

文字通りの困った時の神だのみで、すぐさま鬼王神社へ飛んで行って、神前に両掌を合わせ念入りに祈願してからお札をいただいて、早速「豆腐断ち」をはじめた。

甚助は生来豆腐がそう好きというほどでもないから、五日や十日豆腐を食べなくても苦痛でも何でもなかった。

が、十日たつても腸の具合はよくならない。その日によつてだが、二回、三回、それもきまつて忙しい最中に便意がおこる。「なんだ効かねえじやねえか」

彼は半分怒りかけた。

その時、偶然戸塚町の親戚に法事があつて出か

け、そこで野草医の稿本某という人に逢い、自分の腸の事を訊いた。「成程、出職だけにそれはお困りじやろう。しかし神様のおはからいになった豆腐断ちの秘法がただちに効かぬと判断するのは早計の至りというものじや。自分でも工夫したらよろしい」

稿本某はあご髭をなぞって教訓する。

「どう工夫するんです」

「神札を握りしめた掌を、腹の上に乗てるのじや。ほれ、よく手当が行届いたとか、手当の甲斐もなく、と言っじやろう。人間の掌からは、自分の病氣は自分で治そうという不思議な力があるのじや。その助けを借りれば或いは治るやもしれぬ」

「本当ですか？本当に治りやすか」

「わからん。物の本にそう書いてあるから、そう教えただけじや」

本当かな、と半分疑問を抱いたが、甚助は治らなくて元々と、家へ帰ると早速手当をはじめた。一日、二日、三日はダメだったが、毎夜、寝てから朝起きるまで辛抱強く腹に両掌で手当をしているうちに調子が変わつて来た。むろん「豆腐断ち」は続けている。

五日目、昼間の便通が一回になった。

そしてそれが五日続き、あとは断続的に、そして一ヶ月がすぎると、あの忌しい昼間の便通はまったくなくなつた。

バンザイ、バンザイと叫んだかどうかは判らぬ

が、甚助は嬉しさの余り、自分の体験をあちこちへ行って喋り触れまわつた。

これを聴いた者は、「では俺も、私も、ためしてみよう」という事になり、いつしか鬼王神社の豆腐断ちは定着するようになったという。

豆腐断ちがよかつたのか、併せての手当がよかつたのか、科学的に、医学的に、どうだか判らないが、信心にはこれに類した話がいくらでもある。従つて「迷信だよ」と一言で嗤い去るのは、その人間の思い上りというものではないか。故語に「心に信なき者は信するに足らず」とある通りではなからうか。

とにかく豆腐断ちはともあれ、鬼王神社という変つた名の神社、そして祭礼日の変つた風景、正に一見の価値はあると思う。

行き方は新宿駅を降りて歌舞伎町をぬけ、職安通りの角に在るゆえずぐ判る。

住所は、東京都新宿区歌舞伎町二一七―五である。
—おわり—



(表紙説明)

■陸上自衛隊普通寺駐屯地の赤レンガ倉庫

JR普通寺駅から歩いて約15分。陸上自衛隊「乃木館」の向かいに並ぶ。東・南・北と放射状に配置され、明治後半から大正にかけて建てられた。

所在地 / 香川県普通寺市南町二一ー一

「酒林」随筆特集 第七十八号

平成二十一年十一月一日号

発行人 西野信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市亀井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、「一報下さい」。